

平成26年10月21日

高山市長 國島 芳明 殿

「生物多様性ひだたかやま戦略実施行動計画」に対する具体的提言

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会
会 長 飯田 洋

1 環境省、林野庁に関わる諸保護制度実状の再検討、見直しを行い、国・県への提言を行う市民参加型の委員会の設置を望むものである。

(例えば、御嶽山の国立公園への昇格、緑の回廊・各種保護林の拡大、自然公園の地種区分の見直し等)

2 2013年に高山で行われた「第13回ライチョウ会議岐阜大会」において、ライチョウの実態把握の調査が他県に比べて非常にお寒い実態が明らかになったが、ライチョウが生息する県として恥ずべきことである。飛驒山脈域で、継続的なライチョウ調査の実施をすべきである。

3 城山公園は1970年代まで日本一のオシドリの繁殖地であった。1998年を最後に繁殖は途絶え、チゴモズ、アカモズ、ヒクイナ等も市内から姿を消した。稀少生物保全のモデル事業として、城山のオシドリの繁殖地の回復を目的に、飛驒地域一帯のオシドリ生息調査を行い、先ずは現状把握を行うべきである。

4 生物多様性の危機の大きな原因に里地里山の荒廃があげられる。原山スキー場跡地はユウスゲ、キキョウ、コオニユリ、オミナエシ、ササユリ等々、古くから里山では当たり前であった希少な植物が残っている。しかし、このまま放置すればいずれ林となり消滅する運命にある。こうした植物を保護するために、草原の一部を定期的に採草することによって希少植物の更新・再生をはかる必要がある。そのためには自然公園法16条の公園管理団体などに採草を行わせるなど、市民と協働の実践行動の実験場とする手法を検討すべきである。また刈取った萱は飛驒の里などで利用する。その他、傷病鳥獣の保護（野生鳥獣救急活動）、希少動植物の保護増殖などのためにも原山に「生物多様性センター（仮称）」を設置し、活動の拠点とするよう岐阜県に積極的に働きかけるべきである。

5 我々は、原山で哺乳動物、鳥類、植物の定点観測を数年前から継続して行っている。今年も調査を開始している。市民に呼びかけて、市民レベルでの様々な野外調査を行うことを提案する。

◎ オオハンゴウソウの駆除に多額の予算がつぎ込まれているが、実際の効果は目に見えるものではない。実態はオオキンケイギク、セイタカアワダチソウ、ハルザキヤマガラシ、ハルジョオン、フランスギク、ヘラオオバコなどが憂慮すべき状態にある。したがって、先ずはこれら外来植物の生育生息実態調査を実施し現状把握をすべきである。そのために、市民を巻き込んだ（コンサルタント任せでない）帰化植物調査団（仮称）を結成し、3～5年計で市域全体の実情調査を行うべきである。

◎ シカ、イノシシ、サル、カモシカなどの目撃情報による生息分布調査を、体系的に行う。コンサルタントに委託する調査ではなく市民レベルで行うことで、たとえ精度は上がらなくても、市民参加の方法で調査を行うなど、生物多様性に対する意識改革を目差すべきである。

◎ 上記調査を親子で実施すれば、生物多様性の自然環境教育にもつながる。単発的なイベントの「カワゲラウォッチング」より、よほど広範囲に行えるはずである。

6 河川生態系保全の立場から「宮川へのコイの放流」を中止する。そのためには先ず市内の河川の観察会を行い、川辺を含む河川の自然生態系を市民に学んでもらいつつ、コイの放流中止のコンセンサスを作っていくべきである。なお、河川整備は、生物多様性を最大限保全する工法（多自然型工法）で施工されることを望むものである。

7 各地域の公園の整備では、コスモス・ヒマワリ・サルビア・マリーゴールド等外来園芸種による均一花壇造り（特に道路脇）が目立つ。多様性保全の立場からこれら花壇造りの見直しを行い、「生物多様性ひだたかやま戦略」の目に見える具体的・象徴的事例として、駅西空間に「飛驒の森」、「野草花壇」の造成を行う。

◎ 温帯を代表するブナ・イヌブナ・ミズナラを主にした落葉広葉樹の幼木を、近隣の山から入手し、飛驒高山を象徴する森造りを行い、街中に多様性に富んだ緑の空間を創出する。

◎ ヨーロッパ式園芸花壇造りから脱却し、飛驒に自生種の野生花壇を駅西空間に展開し、「生物多様性を目差す街造り」の目玉事業とする。ニュージーランドではイギリス式庭園による花壇造りを見直し、自生種による緑地造りが盛んに行われている。日本では東京駅近くに1ヶ所実験花壇があるのみである。

上記2点については全国に先駆け飛驒高山こそが取り組むべきである。

生物多様性を考慮した公園整備が行われていない。上で提案した「野草花壇」などのために、生物多様性マニュアルを作って市民に配布していくことも一つの方法として提案したい。

8 城山一帯の過密針葉人工林の間伐

広大な針葉人工林の広葉樹林化を目差し間伐を行い、林床植生の多様化及び落葉広葉樹林の育成を行い、森林生態系の多様性を取り戻すモデル事業として実施するよう提案したい。

9 合併後の市域拡大に伴い、自然環境理解のための基礎データである植生などの調査が必要である。市域内の植生等の文献による調査は済んでいると聞いているが、各文献の調査時期はバラバラで現状・実態との差は大きくなっていると予想される。じっくりと腰を据えての市域全体の群落、群集調査や希少生物の調査を行うべきである。このことによって、地域特性を浮き彫りにした地誌作成をする。市域全体の現状調査を市民の専門的知識を持ったハイアマチュアにも積極的に参加してもらい組織化して行うと良い。

10 生物多様性に関する人材バンクは独自に整備し、広範囲な市域全体への派遣をおこなう。現行の人材バンクは、生涯学習課の出前講座のためのものであり、実態にそぐわない。ジャンル毎に人材をリストアップしてデータベース化すべきである。また、(財)日本自然保護協会主催の自然観察指導員講習会を定期的に高山市（の各地域）で行い、人材の育成に資するべきである。この講習会には全国各地から講習生が集まり、観光・地域振興にも繋がるものである。

11 生物多様性の副読本が小中学校に配布されているが、どのように活用されているか実態を把握し、併せて配布の効果の検証を行うべきである。

12 各地域の町誌・村誌の記述が現状にそぐわなくなっている。飛騨後風土記ならぬ、「飛騨今風土記」を作ったらどうか・・・調査手法としてもユニークだと思われる。